夜会に鳴く深紅の鳥

耳子

　前触れもなく訪れたその人に、アンは目を見開いた。
「陛下…どうなさったんです、」
　普段は改まることのないこの口調も、驚きのままに変えられる。何がどうなって、この私的な空間であるトスカルナ邸にこの人が現われるのか。
「……ここへ来るのも久しいな」
　しみじみと呟いて、ディアスは周囲をぐるりと見回す。薔薇の植えてある庭、ここから見える王宮の景色、部屋へと通じる細い回廊———八年前と何一つ変わってはいない。
　彼の、少し低くなった声と、幼さの完全に抜け切った鋭利な眼差し、何よりも皇帝として貫禄を増した風体を見つめアンは思う。ただ変わったのは自分達だけだと。
　もはやこの長い年月、二人の間に男女の関係があっただろうことは誰しも覚えてはいないはずだった。
「何か御用が？　このような夜更けに、ウズも屋敷には戻っていませんよ」
　ようやく「現在の」自分を思い出し、言葉を繋げる。ディアスは珍しく皇帝の正装のまま、薄めの外套を羽織っている。一方の自分は、寝ぎわのために女物の寝衣を纏っている始末。——女を捨てた自分が、こうして再び軍服を纏わずに誰かと接するなど。着替えるのじゃなかったと後悔しつつ、ディアスの黒の瞳を見上げた。
「やはり、軍医を辞める気にはならないのか」
「……ありませんね、今の職が天職だと感じてます」
　ふ、と吐き出すように笑って、ディアスは肩の力を抜いた。
「八年前、いきなり姿を消したアンジャハティ嬢が、五年ののち現れ医者になった聞いたときには、驚いたものだ」
「……ええ」
　わずかに笑って、アンは庭を見つめた。深紅の薔薇が咲き誇る、美しい庭園。八年前とは代わりはないが、この薔薇が咲いた様をディアスが見ることはなかった。
　五年のあいだ、医学を学ぶために隣国のリマへ密航し、それから帰って軍へと入った。トスカルナという皇籍は失ってしまったが、それはかえって幸運でしかなかった。皇家トスカルナの姫ともなれば、婚姻は避けられない。なによりも女であることから逃げたかったあの頃の自分に、「家」は重すぎたのだ。
「……ウズルダンが植えたのだったか」
　薔薇の咲く庭に降りて、ディアスはその低い声を発する。
　暑い気候の中で、この薔薇はほとんど一年中咲くように改良されている。けれど盛りというのがもちろんあって、今の時期はまだ蕾が大部分を占めていた。
　ディアスは美しい花弁を垂らすものではなく、深紅の色がわずかだけのぞいている蕾のほうをじっと見つめている。
「腹の立つ兄でしょう。これで償いのつもりなら、あの涼しい顔を殴ってやりたくなります」
　ディアスの目線の先、一際大きく咲く薔薇の蕾に手をかけて、手折る。

「差し上げますよ。この蕾がお好きなら」
「蕾か……耳が痛いな」
「痛くなるようなことでも、なさったんですか」
「――いや。いいかげん、皇籍に身を戻したらどうだと言いに来たのだが。あの老いぼれが死んで、もう二年にもなる」
　名前までアンだなどと、とても皇族の姫君らしからぬものを名乗って。
「アンジャハティ姫は死にましたよ。八年前に、背中の傷が元でね。今あるのはただのアン、男でも女でもない一人の人間です」
　背の傷も、……腹の傷も癒えた。ただうっすらと残る桃色の瘢痕を残して。
「ならばその一人の人間として皇族に戻れ。婚姻せずともトスカルナを継げるよう計らってやろう」
「……陛下？　トスカルナはウズが、」
　言いかけて見やると、ディアスの褐色の頬には苦笑めいたものが浮かんでいる。
「勅命は下さん、アンジャハティ・トスカルナ。早く皇族に戻る決心をしろ」
　薔薇の蕾を手の中でくるくると回しながら、ディアスはこちらに背を向けた。
「何をなさるおつもりですか」
「……何も」
　広くて大きな背中を見上げて、アンは顔を曇らせる。後ろ背では、何を考えているのかさっぱりわからない。
「では陛下こそ、早くお戻りになられたほうがよろしいかと。昔日のディアス皇子は、それはそれは出来た御方でしたから」
　背負いすぎた闇に、いつか潰されてしまうのではないか。先帝の死後、“解放された”彼を見て、そう思ったものだった。薄暗い地下の鉄格子は、この男から人らしさというものを覆い隠してしまったのだろう。昔はもっと優しげに笑っていたその笑顔は、ひっそりとどこかへ消えてしまった。
「持ち上げてくれるものだな。……子すら守れぬ男が、出来たものか」
　吐き出すように呟いて、ディアスは押し黙った。
　きっと哂っているのだろう、自分を。そう思えるほどの沈黙を残して。

＊　＊　＊　＊　＊

　――遠くのほうで音楽の音がきこえていた。
　カヌーンとレク、ウードが奏でる軽快な調べに混じって、踊り子が踏み鳴らすアンクルベルの鈴音が、しゃらん、しゃらんと響きわたる。
「お出でにならないのですか」
　回廊に出て、花のない庭を眺めていたアンの背中に、侍女の声が降りかかる。

宮殿で催されている宴は、第一皇子の生誕日を祝うものだ。皇族の女性ならば出席が許されていたけれど、あまり気が進まない。
ラジル皇子は二十五歳で、ギョズデ・ジャーリヤを十人、ジャーリヤを三七人持っている。その中にいずれ自分も含まれることになるのだと思うと、尚更に気が滅入る。
「せっかく着付けてもらったのに悪いけれど、このままここに居るわ」
父は花が嫌いらしい。何も植えず、ただ小鳥の休む小さな香木だけが二三。庭園にあるのはそれだけだった。
「……？」
その香木の向こう――……城の道へと続く門の方に人影を見た気がして、アンは静かに覗き込む。
「アンジャハティ姫？」
「は……はい、そうですが」
高い塀の向こうから、聞き覚えの無い男の声に名を呼ばれる。
「迎えに来たのだが、男は通してもらえないようだ。そこの番兵に言ってやってくれないか」
「……どなたさまですか」
「ディアス。……ディルージャ・アス・ルファイドゥル・バスクス」
現れた少年は、もう大人ほどにも背が高く、身体つきも華奢ではない。鍛えられた筋肉がしっかりとついていて、たくましい印象だった。
「第四皇子殿下？」
帝位の継承権を持つ男子の中で、最も年少の皇子。たしか年のころは十五くらいであったはずだ。自分より三つも歳が下だというのに、なんと早熟な御方なのだろう。同じ皇族であっても、異性の前に顔を出さぬアンにとっては所見にも等しい顔であった。
「アンジャハティ・トスカルナ、ラジル皇子殿下があなたに会いたいと仰せでな。お陰で俺は使いっぱしりだ」
おどけたように肩を竦ませて、微笑む。きつい印象を受ける顔なのに、素直に笑うその顔はどこか優しげにすら見えた。
「……やはり、行かなくては駄目でしょうか」
闇に溶け込む漆黒の瞳を見上げて、アンは問うた。
相手は第一皇子。そしてその使いに寄越されたのが第四皇子であるならば、もう誘いを断ることはできない。けれどこの笑顔を見て、アンは小さな希望を抱いた。自分を見逃してはくれないかと。
アンの紺碧の瞳を見下ろして、ディアス皇子は困ったように眉をひそめた。やはり、見逃してもらうことはできないらしい。
小さくため息をついて、侍女に外出することを告げようとアンが振り返ったその時、
「わかった。このまま俺が戻らなかったら、兄も諦めがつこう」
悪戯を思いついた少年のような顔をして、ディアスは笑った。
「ちょうど退屈してたところだ。匿ってくれないか」

忘れもしない、十八歳の暑い夏の夜――……、

これが悲劇へとつづく、最初の出会いだった。

02

　その日はとても暑く、もう夕方だというのに、昼に鳴く虫の声がいつにも増して大きく聞こえていた。
　日暮れの藍色に変わり始めた空が、ちょうど大窓の向こうに見える。ああ……今日も一日が終わるのだと、思わずにはいられない夕陽だった。

「父が……私に婚姻をと申してまいりましたわ、ディアス」
　アンジャハティは小さくため息をつきながら、寝台にひとり、裸のまま寛いでいる第四皇子ディルージャ・アスを振り返る。
　頭の下に腕を組み、彼はどこか遠くを見つめていた。名を呼ぶ声にその黒い瞳は、わずかに細まりこちらに向けられる。
「その様子だと、俺が相手ではないらしいな」
　あの出会いの夜から早ひと月。二人の関係が熟するのに、さほど時間はかからなかった。
　ずっと宮にこもり、退屈な毎日を暮らしていた“良家の令嬢”にとって、彼の存在は新鮮すぎた。まるで風のようにさっと吹き、あっという間に心も身体も攫っていってしまったのだ。けれど突然に言い渡された婚約の知らせは、“やはり”と肩を、落とさずにいられない相手だった。
　もう十八を迎えた娘にしては、婚姻が遅れているのはわかっていた。宰相である父の政治上の理由から、こんなにも先延ばしにされてきたのだ。ずっと知らぬふりを続けてきたけれど、十四を過ぎた辺りからは、自分が嫁ぐだろう人の名前ぐらい悟ってしまったのも事実。アンジャハティはため息ながら言葉をつないだ。
「ラジル皇子殿下は、私たちのことは？」
「知らない、と信じたいものだが……まあ無理な話だろうな。この手の噂は、侍女や小姓には恰好の餌になる」
　すなわち、広まりやすいということ。城中を頻繁に行き来する「彼ら」は、いわば歩く看板に等しい。ひとたび情報を書き込めば、次の日には多くの者が知るところとなる。
「ならあなたは、お兄様の婚約者に手をお出しになっているということになりますわね」
　侍女たちの看板効果は、今回のことも同じ。ディアスと関係を持ったことなど、あっという間に城中に知れ渡る。
「そうだな……だが知ったなら、あの独占欲の塊は黙ってないはずだ」
　渋々といった様子で呟くディアスに、アンジャハティーは頷いた。
「ラジル皇子殿下はなんというか……」
「気が短い？」
　ふ、と笑ってディアスが付け足す。
「…え、ええ、けれど、……そう軽々しく言うものでは」
　心中の感想を言い当てられ、口ごもる。いくら本人がいないからと、皇子の欠点などそう口にしていいものではない。
　アンジャハティの焦りようを見て、ディアスは楽しげに笑った。

「兄上の取り柄といえばその“決断力”ぐらいだ。貴女を奪った俺がどうなるか、お楽しみだな」
　冗談を言うように軽い口調で、ディアスは寝台から立ち上がった。寝台のそばの卓に掛けられていた上衣を簡単に羽織り、窓際に立つアンジャハティの隣へと移り来る。
「どうなるかだなんて、」
　並んだ視界にしなやかな褐色の胸元が写り込み、アンジャハティは自らの顔が熱くなるのを感じた。さきほどまでこの広くたくましい胸板の上に、頬を寄せていたのだと考えるとなおのこと。
「わかっていたことではないですか、あの夜だって」
　ラジル皇子の祝いの宴に出席しなかったことが、結果裏目に出てしまった。
　空いた席の主を尋ねたラジル皇子は、『私の前に出たがらぬとは、大胆な女だ』と笑った。そばに居た第四皇子を呼び寄せて、直々に連れくるよう命じたところまでは、ほんの遊びのつもりだったらしい。だが、その第四皇子は“深紅の美”と噂されるアンジャハティ姫の元から宴の席へと戻ることはなかった。翌日には広まっていた第四皇子と美姫の恋歌に、気の短さで知れ渡るラジル皇子が憤慨したのは言うまでもないこと。
「俺は後悔していない」
　言いながら抱き寄せられて、額に彼の唇を感じる。女のくせに、すくすくと育ちおってと父に嘆かれたこの長身も、彼の前では背伸びしても並べない。その鋭利な顎筋に指を添わせて、アンジャハティは微笑んだ。
　宰相である父の命令は、すなわち皇帝の命令にも代わる。ラジル皇子と婚姻しろと言われれば、逆らいようがないのが現実。それに父にしても、第四皇子に娘が貰われていくより、第一皇子であるラジルの申し出を受けた方が得と見越したのだろう。第四皇子ディルージャ・アスは、剣技にも秀で軍師の舌すら巻かせるほどの戦才の持ち主だった。けれど、“所詮は”第四皇子。兄三人が突然死でもしないかぎり、彼の未来に玉座は無い。
「アンジャハティ」
　ディアスの濡れた唇が、ゆっくりと額から首元へ降りくる。心地よさに目を閉じて、彼の頭に腕を絡めた。
　一緒に居させてください――……そのたった一言の言葉が、許されない。
　言えば彼は頷くだろう。けれどそれは、場合によってはディアスに“陛下を裏切ってくれ”と頼むことにも代わる。
　平民の母親から生まれた第四皇子は、いつの間にか他の皇子たちを凌ぐほどの戦才を見せ始めている。ただでさえ足元は危ういというのに、この期に及んで宰相の娘であり、皇帝を輩出したこともあるトスカルナの姫をジャーリヤに迎えるなどと。
　余計に命を危険にさらしてしまうことになるだろうに、そんなことを言い出せるはずがない。
「ディアス、」
　この名を呼ぶのは、あと何回あるのだろうか。そんなことを頭の隅で考えながら、それでもアンジャハティは淀みなく囁いた。
「――陛下と、父の御命令に従います」

父から言い渡された婚姻の日取りまで、もうふた月も無かった。

「よいなアンジャハティ。ラジル皇子の後宮に入り、早く殿下の御子を授かるのだ。もうじき殿下の立太子も決まっている。お前の血筋なら必ずや、ラジル皇子が皇帝に即位した折にはサグエ・ジャーリヤの称号が頂けるであろう」

“婚姻”とは名ばかり。そもそもは彼の言うようなサグエ・ジャーリヤになることこそが、本当の意味での婚姻だ。ジャーリヤもギョズデ・ジャーリヤも、所詮は奴隷と同じ、“所有物”に他ならない。愛妾がハレムでの地位をのしあげて、皇帝と対等の地位を得る——それがこの国で最も自由を約束された、女の栄華の道。

アンジャハティは大きな鏡の前に写る自分を、ぼんやりと眺める。

白い絹の衣装に、藍色の上套——ラピスラズリの首飾りが侍女の手から頭を通り、しゃらりと小さな音をたてた。赤く長い髪は項を中心にして左右に分かれ、頭の上までゆるく編み上げられている。

“深紅の美”と——言い始めたのは誰だったか。人前に顔を出さぬイクパルの女性の美しさの評判は、もっぱら噂のみで広がる。こんな容姿、いいと思ったことなど一度もなかった。やおら見かけがいいせいで、好きでもない、逆らえぬ身分を持つ男の元に嫁がねばならないなどと。

「やはり、我が子ながら美しいな。誇らしく思うぞアンジャハティ。お前は背が高いが、ラジル皇子殿下はお前より頭二つは高い。並んでも、見劣りはすまいて」

「そうなのですか」

頭二つ——ディアスとも確か、そのくらい離れていた気がする。会わなくなって、早ふた月。噂でしか耳にすることのなくなった彼は今、方々の娼館を潰し歩き、貴族の宮に忍び込んでは見境なく令嬢を抱いているのだという。

——恋歌など流れはしたものの、“深紅の美も、遊ばれたのだ”という新たな噂が加わっていた。

「あの第四皇子には困ったものだ。婚前のお前を軽々しく奪うとは。まあ、あれで本気でなくて助かった。いらぬ画策をせずにすむというもの。集めた大元老たちにはお帰り頂ける」

——女を盗られた第四皇子は、兄を殺すのではないか。そんな不安を抱いたのは父だけではないようだった。元老に加えて、滅多に収集されることのない大元老——公王たちまで、帝城に来ていたとは。

「あのように頭の良い方が、私などに本気になるはずはございませんわ、父上」

皮肉をこめたつもりで、アンジャハティは父親の顔を見つめた。彼の見せ始めた“振る舞い”の本当の思惑。流れた噂のお陰で、「婚前のくせ、男に懸想するとはふしだらな女だ」などとアンジャハティを非難する者は誰一人いなかった。ただただ可哀想なお方だと、ラジル皇子なら真に愛してくださるという祝いと慰めの言葉ばかり。

ディアスはアンジャハティとの関係を“遊びだった”と他に思わせ、ものの見事にに「何の罪もない被害者」に仕立て上げてくれたのだ。自分の名声が地まで落ちてしまうのも厭わず。

「ディアス皇子殿下は御年十六になったばかり。まだ、愛を誓うには早すぎる若さですわ」

そう、若すぎる。早熟で切れ者の第四皇子が頭角を現すには、まだまだ早い。女好きでふしだらな男だと、思わせていればいいのだ。そうすれば侮った者も見破った者も、等しく彼に本性を

曝す。
「さあ、行こうぞ。ハレムの門まで、父が先導しよう」

　純白と瑠璃の宮殿に、感慨を抱かなかったと言えば嘘になる。人並みに美しいと感嘆し、歩き回っては壁の模様を指で辿った。
　けれどあとは、通された部屋の窓縁で、月光が射し込んでくるのをじっと見ていただけ。
　ハレムというところは、こんなものか。自分の宮に籠もっているのと、さして代わり映えながない。唯一変わるとしたなら、これから毎日、ラジル皇子のほかのジャーリヤたちと、皇子の寵愛を争わねばならないことぐらいだ。
「……アンジャハティ姫」
　ふぁさり、幕が開く衣擦れの音がして、継いで男の声が響いた。その低い声に、アンジャハティは慌てて振り返る。
　ディアス……？　そう呼びかけようとするが、目線の先には月の逆光で真っ黒に染まった人影しかみえない。
　ディアスの深みある声色に似ていた気がして、アンジャハティは立ち上がる。
「ほう……噂に聞くとおり美姫ではないか」
　続けざまに発せられた、彼より一層低い渋みの増した声色。アンジャハティは進みかけた足をひたりと止める。
　明らかに、ディアスではない声。
　ディアスも低い声音を持つが、年に合う若々しさが漂っていた。今聞いた声が彼のものだとしたなら、随分と年をとり過ぎている。
「誰……」
「息子にやるには勿体無い美しさだ」
　するすると音も立てずに近寄り来る真っ黒な影に、アンジャハティは悲鳴を上げそこなった。窓から射す月明かりに人物の顔が浮かび上がる。
「陛……！！」
　薄青い月光に照らされた顔を見て、アンジャハティは驚きに目を開けた。こんなところ――ラジル皇子のハレムに居るはずのない人物。
　なぜ……そう問いかける以前に、伸びてきた大きな手が肩元を掴み、強い力で押していく。
「ど、どうなさったのです？　ラジル皇子はこちらには……」
　体勢を崩して絨毯の上に尻を落としたアンジャハティは、まだ事態が飲み込めていなかった。
「大人しくしているがよい。死にたくなければな」
　のし掛かった重い体重に、アンジャハティはようやく気づく。けれど、振り上げた両手をたった一本の腕で抑えつけられては、ただただ悲鳴を上げるしかなかった。

「きゃあああああ！！　誰か！　誰か！」
「無駄ぞ。余がここにいることは、みな承知なのだからな」
「お……やめくださ…陛…ぐ！」
　口を塞ぐように男の唇が襲いきて、アンジャハティの悲鳴がくぐもる。
「ラジルはチャダ小国に向かわせた。当分は戻らぬ。前から余はお前を欲しいと思っておったのだ」
「あぁ……！」
　――無理やり、押し開かれた唐突な痛み。
　……気絶してしまえたなら、どんなに楽だっただろう。
　か細い神経を持ちあわせてはいなかったことを、あんなにも呪わしく思ったことはなかった。
　押し付けられた毛の硬い絨毯の上で、背中がずりずりと擦れて捲れていく。
　アンジャハティは悲鳴すら忘れて、長い間、人形のように揺さぶられ続けた。

葬式に出席しているような顔だった。
寝台を取り囲んで立ちすくむように、父と医師、そしてラジル皇子が並んでいる。
「ご懐妊にございます」
おめでとうございます、という言葉を医師は口に出さなかった。その暗い口調は、まるで死期の迫る患者に死を諭すもののように聞こえた。
冷水を浴びせられたようなびりびりとした感覚が、頭に襲い来る。アンジャハティは死期の宣告を受けたような気分で、寝台に横たわる自分を見下ろす暗い顔から視線を反らした。
「アンジャハティ……そんな顔をするな、名誉なことだ」
長い間押し黙っていたせいで、突然発せられた父の声はどんよりと重苦しい。けれどそんな顔をするなとは、よく言ったものだ。一番“そんな顔”をしているのは、他でもない自分たちであろうに。
言葉とはおよそ噛み合わぬ態度で、父はアンジャハティの冷たくなった左手を握った。
「やめてください」
書籍ばかりをめくっている、軍人では決してないその細く長い指を乱雑に振り解いて、アンジャハティは起き上がった。
「ディアスですわね？　そうなのでしょう、父親は。きっと彼です。ならば私は……私は」
自分の声が、遠くに響くような感覚。ぼやぼやと耳鳴りがして、すべての音を身体が拒絶している。
彼の子ならば、なにも怖くはない。たとえこの身分を失っても、命が危うくなろうとも、産んでみせる——アンジャハティは狂ったように、泣きながらそう叫び訴えた。
「アンジャハティ……」
宥めるように名を呼ぶ父の向こうで、深く細いため息を残したラジル皇子が、部屋を出て行くのが見えた。ハレムに入宮して三月——彼とは一度も肌を合わせてはいない。夫となったラジルはこの三月のあいだずっと、直轄領の北の方、ちょうどバッソスとチャダ小国の国境の付近で両国の睨み合いを牽制していた。
「ジャーリヤ・アンジャハティ、最後に第四皇子殿下と、お会いしたのは、」
「五ヶ月ほど……前ですわ」
落ち着きはじめた頃を見計らい、医師は質問した。しばしの時間を空けて答えたアンジャハティの、頬に涙が伝う。
——腹はまったく膨れてはいなかった。月のものが来ないと気づいたのはここ最近のこと……。もしやと不安に思っていたら、案の定、食事をもどしてしまうようになった。
どう計算しても、五ヶ月というのは無理がある。
「ジャーリヤ・アンジャハティ、よくお聞きください。お宿りになった御子は、」
葬式のような顔をやめてほしい。やめて。
アンジャハティは医師の言葉を遮るように、寝台から這い出し、転げ落ちた。
「アンジャハティ！」

「ジャーリヤ！」
　医師と父、二人が慌てたように駆け寄ってくる。
　深紅に織られた絨毯の上に爪を立てて、アンジャハティはむせび泣いた。
「産みたくありません……！」
「わかっておろう、アンジャハティ。それは出来ぬことだ。その御子は、」

　“現帝アエドゲヌ陛下の嫡出となるのだから”

　聞きたくなどなかった最後の宣告を受けて、アンジャハティは目を固く瞑る。
　葬式だと――思った。
　自分という存在が、ゆっくりと死んでいく。
「彼に逢わせて……」
　かすれた声で呟いて、下唇を固く噛んだ。警備の強化は目に見えている。逢えるはずもないというのに。それでも逢いたい。彼に逢いたい。
「――ご懐妊の報告を陛下に致しましたところ、明日にでも陛下のハレムへと御身をお移し頂くことになりました。アンジャハティさま、皇帝宮にお入りになれるのでございますよ。それまでご自宅で、しばしお休み下さいませね……」
　そっと寄り添った侍女が囁くのが、遠くのほうで聞こえていた。

　――季節は暑いあの夏の夜を、あっという間に奪い去った。
　もうじき灼熱の国イクパルにも、乾いた空気と高い夜空に散り輝く星々が、冬の訪れを告げる。

漆黒の闇。……覚えている色彩といえば、それだけだ。
皇帝のハレムへ移る前の晩、アンジャハティは戻されたトスカルナの邸宅で一人、寝台にうずくまり泣いていた。自分はどうなってしまうのだろう……そんな独りよがりな悲しみだけが、頬を濡らし続ける。
会いたいと願っても、会えるはずがない。
第四皇子と恋仲を噂された女が、第一皇子のハレムに入宮し、あろうことか皇帝の子を身篭ってしまった。こんな醜聞を、皇家が甘んじて見逃すだろうか。第四皇子も第一皇子も、厳重な監視下に置かれたと聞いた。警備をすり抜けたとして、ディアスがここまで辿り着ける可能性は無いに等しい。
「ディアス……」
本人を前に呼ぶことの許されなくなったその名を、擦れた声で呟く。
ごめんなさい、ごめんなさい。こんなことになるならば、いっそあの時に懇願していればよかった。――自分を連れて逃げてくれと。けれど結局は、同じような結末に転んでいたのだろうか。自分たちに終着はないのだと、運命はあざ笑う。
「綺麗な声が、擦れてしまいますよ」
囁くように柔らかな声が、振り降りてくる。うずくまる背をゆっくりと撫でる暖かい手のひらを感じて、アンジャハティは顔を上げた。
「……お母様」
「おかえりなさい、アン」
久しぶりに見上げる母の顔は、慈悲を願いたくなるほどに優しく、美しかった。室内をヴェールも被らず歩く少女のような人。隠すことなくさらされたその懐かしい顔を見つめていると、いっそう涙が溢れてくる。
「私……おかあさま、」
「ここで殺されようとも、アン。母はいつでも、あなたの味方ですからね」
母はゆっくりと微笑んで、その顔をすっと引き締める。移した視線の先に、何があるのか――その方向に目を向けてから、アンジャハティは震えた声を上げた。
「ディア……！！」
窓の向こう。暑い夏の日々と何ら変わらぬ場所に立つ彼の姿を見つけて、驚嘆した。どうして……、ここへ来られるはずがないのに。厳重に張られた警戒の中を、いくら彼とて単独では……、
「まさか、お母様、」
「ああ、母君にご案内頂いた」
母の代わりに、低い声が答える。五月ぶりに見る彼は、どこも変わることなく、静かにそこに佇んでいた。
「アンジャハティ」
もう二度と、呼ばれることがないと思っていた。

　アンジャハティは近寄り来る彼の顔を見上げて、その胸に飛び込もうとした足を留めた。……湧き上がる罪悪感が、彼にすがることを寸でのところで制する。
「ディアス……」
　俯いて、唇を噛んだ。何と言えば、いいのだろう。“会いたかった”、“愛している”、“怖かった”――色々な言葉が脳裏に浮かんでは消えていって、結局、何も言うことはできなかった。彼の名を呟いたまま、彼に抱きしめられるまで、糸の切れた人形のように立って。

「すまない、アンジャハティ」

　包みこむような腕の中で、耳元で囁かれた贖罪の言葉に、アンジャハティは目を固く閉じた。胸が痛い。閉じた目の縁から涙が幾筋も流れたけれど、痛みのせいで、心臓が泣いているようにすら感じられる。
「どうして貴方が、…謝るのですか」
「俺が謝らなくて、他に誰が謝るんだ。皇帝も第一皇子も……俺も、貴女を苦しめすぎた。すまなかった、アンジャハティ」
「そ…んな、ディアス……謝らなくてはならないのは、私の方ですのに」
　彼の広い胸板に、うずめていた顔を上げる。柔らかな感触が唇を覆って、大きな手が頬を掴んだ。
　似ているけれど、まったく違う。親と子では、まったく。その証拠に、彼はこんなにも優しい。
「まだ間に合う、アンジャハティ。その腹の子は、俺の子だと皆に言うんだ。少なくとも、どちらの子か分からなくなるぐらいにはできる」
「でも、そんなことをしたら……」
　子の父親など、口先だけでどうとでもなる。五月の間一度も会わなかった事実を、捻じ曲げればいいだけ。陛下と変わらぬぐらい毎日、ディアスとも会っていたと訴えればいいだけだ。――けれど、それをしたら彼の立場は。
「危なくなったら逃げればいい。俺はその子を我が子と思う」
「ディアス…」
　嬉しさに、涙がまた零れだす。くしゃくしゃになったアンジャハティの顔を困ったように眺めて、ディアスは笑った。頬を掴んでいた指先が、睫毛に光る涙のしずくを受け止める。幼少から剣を扱っているせいで、彼の手は太く節くれていた。けれど誰よりも熱く、頼もしい。この手に守られることが幸せだと、思える。
　彼の肩に両手をついて、背伸びする。顎元までしか届かないけれど、心を込めて唇を寄せた。
「ありがとう、ディア…」
　――だが、その時だった。聞き覚えのある悲鳴が、宮の中から聞こえたのは。
「……お母様の…声ですわ…」
「何が、」

はっとして、ディアスが振り返る。
その視線の先を追って、アンジャハティは目を見開いた。
武装した十人もの兵士たちが、宮の内側から、仕切りの幕を突き抜けるようにして雪崩れ込む。
「第四皇子ディルージャ・アス殿下。第一皇子ラファエ・ジルダン殿下が先ほど、何者かの手により逝去なされました。ディアス殿下の逃亡に、ラジル殿下弑逆の嫌疑がかかっておいでです」
「ご同行願えますでしょうか」
口調だけは礼儀を重んじながらも、手に抜き身の湾刀を握り、胸当てをしている兵たちの姿は、およそ皇族に対するものではなかった。
「ラジルが殺されただと……？　お前達、ここをどこだと思っている」
トスカルナも、皇族に名を連ねている家柄。帯刀のまま宮に踏み込むことは、例え軍人とて許されることではない。ディアスはきつい口調で、取り囲む兵たちの顔を睨みつけた。
「トスカルナのご令嬢を前に、ご無礼をお許し下さい。しかし皇族殺しは重罪。例外をお認め下さるよう願います」
「ディアス殿下を疑うというの…？！」
「……弑された時刻に、軟禁されているはずのご自分の宮にいらっしゃらなかったのですから、疑いの目は避けられぬことかと存じます。――さあ、ディアス殿下、元老院が収集されるまでギスエルダンに」
「ギスエルダン…？！　牢獄ではないの！」
ギスエルダン……重罪を課せられた罪人を、生涯に渡り監置する地下牢。曲がりなりにも皇族であるディアスが、元老院が収集されるまでの“一時”を過ごさねばならぬ場所に、相応しいものではない。
人はギスエルダンを、死ぬよりも酷な場所だと言う。未だかつて　地獄（ギスエルダン）　と字されるそこを、生きて出たものは無い。
「陛下のご命令なのです、アンジャハティ姫。どうか背かれませんよう」
すっと一礼をした後に、先導らしい兵の一人がディアスを見やる。
険しい顔を浮かべて、ディアスはアンジャハティを振り返った。
「ディアス……」
伸ばされた手を掴むと、彼は僅かながらに微笑んだ。
「疑いはすぐに晴れる」
大丈夫だ、そう頷いた後、兵たちに目を向ける。
「陛下のお達しならば、従おう」

――ディアスが　地獄（ギスエルダン）　に送られて間もなくのことだった。第一皇子に続いて第二皇子、第三皇子までもが不可解な死を遂げ……、
アンジャハティの腹部は、皇帝のハレムで膨らみ始める。

けれど時が経っても、収集された元老たちが、一時監置された第四皇子の釈放を認めることはなかった。

寒い夜がつづいていた。砂漠から少しだけ離れた帝都は、それを囲むバッソス公国ほど昼夜の気温差はない。しかし冬が近づくにつれ、昼は渇いた暑さがじりじりと身を焼き、夜は冷たい寒さが頬を突くような、砂漠に特有の気候が目立ちはじめる。

陶磁の床を裸足で歩きながら、アンジャハティはその冷たさに肩を竦めた。駱駝の毛でできた薄手の外套を羽織っていても、鼻から入り込む冷えた空気が体中を凍らせるようだ。

「……早く行かなくては、」

目的地は皇帝陛下の寝室。

第四皇子がギスエルダン牢獄に拘束されて以来、二月ほども時が経つ。第一皇子殺害の容疑はとっくに晴れているはずのディアスの釈放を、幾度となく収集された元老院はなぜか拒み続けている。それどころか、不可解な死を遂げた第二皇子、第三皇子さえも彼の糸引きだと言い始める始末。……このままでは、ディアスは死んでしまう。

ギスエルダン牢獄は主に重罪の政治犯を監置する牢城。帝都から遠く離れた場所にあるため食物の運搬が潤滑でなく、あげくに管理すら行き届いてない状態だという。地下洞にもぐりこんだ構造を持つ陰湿な＜城＞では、食事もろくに与えられず体罰さえ茶飯事だった。噂は色々あれど、実際、生きて出た者がいないのだからどうにもならない。ディアスをギスエルダンから解放する手段は、皇帝陛下が「出せ」と命じることのみ。なのにディアスを除く皇子の殆どを失って、実質“帝位”を継ぐ者がひとりもいない現状で、皇帝がディアスを案じているそぶりは全く耳にすることがない。“皇太子”の位は、死後のラジル皇子に授けられたままだ。本来ならば、一刻も早くディアスをギスエルダンから引き戻して、皇太子の位を授けるべきだというのに。

愛妾が政治に口を出すなど懲罰ものだが、皇帝陛下と直接口が利ける立場にある現況に、アンジャハティは賭けるつもりだった。

今日、元老院が解散される。冬の季節は自らの領地で過ごすのが大元老をはじめとした議員たちの風習。今日を逃せばディアスの解放は年を越してしまうことになる。一刻も早く皇帝の元に走り、「解放して皇太子に」と奏上することぐらいしか、アンジャハティにできることはなかった。

元老院の収集は早朝。陛下が起き出してくるまで、まだ余裕はある。けれどアンジャハティに宛がわれた私室はハレムの中でも末端の区画。急ぎ足で進んでも、間に合うか否かというところだ。そんな長々と続く回廊を、右へ曲がり左へ曲がり、時には庭を突っ切って、必死に向かう。

どれぐらい走ったことか、皇帝陛下の私室のある庭の前にようやく出ることができた。アンジャハティは息を切らしながら、さらさらと湧き上がり水音をたてる庭の泉を、目を細めて見やった。

「陛下……」

回廊を回っていくより、この庭を横切ったほうが早い。アンジャハティは逸る気持ちを抑えられず、庭に足を下ろした。

「おやめ」

　強い力が右腕を掴んで、上方へと引き上げられる。
「ひっ！」
　小さな悲鳴を喉奥で発して、アンジャハティは右腕を掴む何者かの指先を、辿っていった。
「あ……なたは」
「その紅い髪はジャーリヤ・アンジャハティだな。まさかお前、陛下のご寝室に押し入るつもりじゃなかろう？」
　緩やかに編まれた漆黒の髪と、黒檀のような艶やかな肌。闇そのもののような顔にふたつ、柔らかい栗色の瞳が並んでいる。そこだけ異質とも思える瞳が険しげに細まって、「聞いておるのか」と棘のある声が鳴る。
「ギョズデジャーリヤ・ファラマファタ？」
　別名を、ファラマ公女――テナン公国が唯一、自国から送り出した皇帝の側室。一番家柄がよく、一番先にハレムへと上げられた女性だが、皇女を三人儲けて以来、寵愛を失ったと囁かれている人だった。自分の母と同じくらいの年齢であったか。整った顔からは全く年齢を感じさせないが、それでもアンジャハティより二周り異常も年上に違いはない。
「厄介ごとを連れてきたものよ。陛下のジャーリヤが、“情夫を助けてくれ”とご寝室になだれ込むなど、前代未聞」
「そんなことは……」
「違うというのか？　この時機からみて、わたくしがそう感じたのは無理もないことと思うぞ」
　そんなことはないと、言えたものか。けれど例えそう解釈されてしまっても、ここで引き返すことなどできない。人ひとりの、命すら関わることだというのに。
　反論を口に出そうとアンジャハティの唇が震えたのを横目で見やって、ファラマファタは静かに言った。
「見えるか、あの明かりを。今陛下のご寝室には、小国のあばずれが居る」
　驚いて見つめたものの、栗色の瞳は嫉妬に燃え上がるどころか、静かな色を浮かべている。じっと室のほうを見つめて、ファラマファタは小さな息を吐いた。
「わたくしはな、こうして夜毎、ここで夜を更かすのじゃ。自分の夫になるはずだった男が、新しい女を次々と捨て行くざまをな」
　侘しい女であろう、そう笑ってアンジャハティを見たファラマファタの瞳は、もう笑みを浮かべてはいない。ただ探るような眼差しが、じっとこちらを見上げている。
「あの、ギョズデジャーリヤ・ファラマファタ、」
「――第四皇子は狂ったそうじゃぞ」
　はっと、アンジャハティは目を開く。ファラマファタは栗色の目をわずかに逸らし、月の光をあびて白い輝きをみせる泉を見やった。
「という話を、元老のやつらがしておるそうな。皇太子として再びこの地へ戻しても、もはや手遅れだと。狂っておらぬと言うやつもいるが、それで出てきたとして、果たして皇帝に恨みを持たぬものか？　――なんということはない、アエドゲヌ帝は、報復の暗殺を恐れておるのよ」
「四公ですの……そのようなことを、」

「であろうな、如何にもわたくしの兄が考えそうなこと。それで自分の息子を皇太子に、などと申しておる。これほど馬鹿な話があろうか」
「息子……？」
「末の公子じゃ。テナン公は妃を、アエドゲヌ帝に差し出したことがある。その時の子が、第五公子コンツ・エトワルト……もう十二にもなろうか」
　皇帝の血をひく息子が、もうひとり。
　――では、跡を継ぐ者が“全く無い”わけではなかったのだ。自分の血を持つ健全な公子、いや皇子が、テナン公国ですくすくと育っているというのなら、ディアスをギスエルダン牢獄から早急に出す必要もなくなる。
　頭の中を、冷たいしびれが満たしていく。では、いくら自分が頼み込んだとて、皇帝は首を縦には振らなかったということだ。
「そう。アエドゲヌ帝の目前で頭を床に擦り付けても、無駄じゃったな」
「でも、どうして……」
　あそこで引き止めていなかったら、アンジャハティは間違いなく懲罰を受けていた。“ジャーリヤ”であるファラマファタにとって、敵となる愛妾が減っていくのは好都合だったはず。なのに、なぜ止めてくれたのか。
　アンジャハティは力なくファラマファタをじっと見つめる。
「何を考えておるのか、わたくしにもわからぬ。じゃが、あまり気の快いものではないとは思わぬか。皇帝の室に押し入ったジャーリヤの首が、目の前の庭に転がる様というのは」
「それは……」
　アンジャハティは目を細めて、息を吐く。想像することはやめておこうと、意識の端で思い直した。
「けれど……わたくしも、ディアス殿下を助けなければならないのです。首が転がるのを防いでいただけたことには、感謝いたします。真実を教えていただけたことにも」
「感謝している顔ではないがな」
　くつくつと軽やかな声で笑って、ファラマファタは歩き出した。
「じゃが、このまま放ったら、お前は首を転がすであろう。ついて来るがよい。面白いものを紹介しよう」
　ファラマファタが纏う黄はだ色の衣装が、ふわふわと揺れて去っていく。アンジャハティは自らの真っ黒な喪衣装の胸元を掴み、そのすそを慌てて追った。

　ファラマファタの私室は、以外にもアンジャハティの室の近くにあった。皇帝の室とは間逆の、ハレムでも末端に位置する北東の区画。けれどファラマの足は、私室では止まらなかった。室を過ぎ、回廊をぐるぐると歩き、北端に出て、ようやく振り返る。
「ここが何と言われておるか、わかるな？」

暗がりのせいで灰色に見える、分厚い壁。突き当たりの廊下の壁には、小さな扉がついている。
「……はい」
死ぬまで出られないと言われるハレムの、唯一の「出口」――死の扉。
頷くアンジャハティを見やり、ファラマは長い衣装の袖を傾けた。するりと小さな音がして、銀色の棒のようなものが出てくる。細い金属のそれは、先のほうをところどころ複雑な形に折り曲げられている。鍵のようで、鍵ではない棒。
「いずれここから逃げねばならぬ時もこよう。その時にはお前にこれをやるから、覚えておくのじゃぞ」
そう言って、その棒を扉の錠前に開いた穴へと差し込む。ちきちきとしばらく手首を動かしたかと思うと、ふいにかちゃり、と鍵の開く音が鳴る。
「開いた」
錠前は、全部で十にもおよんだ。それらのひとつひとつを、ファラマは一つの鍵で開けていく。覚えておけ、といわれても、並大抵の所業ではない。
最後の鍵が開き、ファラマが小さな扉を押すと、ぎしぎしと金具がうなる音をたてて、暗闇がぽっかりとあいた。
「入るぞ。わたくしの後について、潜ったら一言も喋らぬようにいたすのじゃ。いいな？」
アンジャハティは頷いて、言いつけどおりに低い姿勢をとったファラマの背中を追った。
久しぶりのハレムの外の空気……乾いた土を擦る足裏の感覚を感じながら、アンジャハティは腰を上げた。
「どうじゃ、巧くいきそうか」
ファラマがひそめた声でつぶやく。はっとして彼女を見やるが、その視線は自分には無い。辿ってみてようやく、暗がりに誰かが立っているのに気づいた。影のようだった人物は、音も無く近寄ってきて、足元に膝を折る。
「なかなか巧いようにはいかんものです」
返ってきた声色は、男のものだ。低く、どこか軍人を思わせるような雰囲気。
「……ふん、お前しかおらんのじゃぞ。早く公子を口説き落とさんか」
捨てるように吐き出した言葉だったが、そのあとにファラマは小さく笑った。
「やはり、育て(あに)親に似て腹の立つやつなのか？」
「いいえ。どちらかといえば、王妃に似ているのでしょう。純朴で、穢れを知らんような坊主です。ところでその方は……お一人ではなかったので？」
男が、ふとアンジャハティに目線を上げる。暗闇に並ぶ茶みがかった濃い色の瞳を見て、アンジャハティは戸惑う。喋るなといわれていては、自分を紹介することはできない。隣に立つファラマを見やると、彼女は囁くように答えた。
「同志ぞ。トスカルナ家の才女、いずれ家名を継ぐことにもなろう娘じゃ」
「……ファラマ殿、あなたさまは一体どこまでお考えなのですか。――トスカルナの姫、俺はワルダヤ・ハサリ。今はそれしか言えませんが、いずれまた顔を合わせることもありましょう。お

見知りおきを」
　アンジャハティは戸惑いながらも、また頷く。
「喋るなと申し渡しておる。いらぬことを口走りそうなのでな。とにかく、お前は一刻も早くテナンの末公子を引き抜くのじゃ」
「わかっております。このまま帝位をテナン公国へくれてやるような真似は致さぬと、これだけは約束を」
　男は一礼ののち、すっと闇に解けて去っていった。こんなに渇いた道が続いているのに、微かな足音さえ聞こえない。
「……では、アンジャハティ。謎解きをしようぞ。わたくしたちは、何をしようとしているように見える？」
「――あ、」
　ファラマファタは、口の端をわずかに引き上げて、笑った。

　ワルダヤ・ハサリ・サプリズ――のちに帝国近衛師団、団長にして大佐の任につく男であった。
　テナンの縁の者に皇太子位を、そしていずれは帝位を――簒奪を企む四公たちの策謀の中、彼は見事にテナン公国の第五公子コンツ・エトワルト・シマニを、小姓として帝都に下らせる。

「忌々しい……元老どもめ、」
　室の仕切り幕を男のようにばっと引き上げて、ファラマファタ現れる。吐き出すように呟いた言葉に、アンジャハティは顔を曇らせる。長椅子に身を預ける彼女の前に立ったファラマの顔には、血の気がまったく感じられなかった。
「いかが致しましたのですか、ファラマさま。お顔の色が……」
　すっと身を起こしたアンジャハティは、ファラマのために長椅子の端へ寄りながら尋ねる。声が震えたのは、彼女の表わす態度に悪い知らせを感じ取ったからだった。
　ファラマファタは深い溜め息のような吐息を口から搾り出すと、唸るように言った。
「釈放の見込みが無くなったぞ――第四皇子ディルージャ・アス・ルファイドゥル」
「な……！？　何故、ですの…」
　目の前にちかちかと星が跳び、アンジャハティは自分の身体の感覚が無くなっていくのを感じた。
「しっかりするのじゃ」
　すっと差し出されたファラマの腕に抱えられ、震える手で椅子の縁に掴まる。
　ワルダヤ・ハサリの働きで、テナン公国の第五公子――アエドゲヌ現帝の隠し種である少年は、小姓身分に身を置くことになった。軍での昇進に小姓の制度を奨励する帝国内では、たとえ親であろうとも「所有物」である小姓を動かすには主の許可が必要だ。ワルダヤはテナン公国の血筋だが、属するサプリズの家名は直轄領＜サグエ＞における最旧家のひとつ。皇帝を産んだジャーリヤを何名も輩出している家柄には、現帝でさえも迂闊には口を開けない。小姓になった第五公子を、たとえ親でも王であっても、簒奪の糧にすることはできなくなるというわけだ。
　第五公子をディアスの“代わり”にできないとわかれば、皇帝もギスエルダン牢獄からのディアス釈放を許可するはず、……だったのだが。
「四公国を黙らせたと思えば、今度は＜サグエ＞の元老どもだ。やつらの言うには、“要は新しい皇子が生まれればよい”のじゃと。狂った皇子を放すには、それなりの準備もいるという。新しい子が日の目を見て、皇子だとわかれば、わざわざ危険を冒すことは無いとな。……どういうことかわかるか？　アンジャハティ」
　まくし立てるように言ったファラマファタは、じっとアンジャハティを見上げる。アンジャハティと比べてずいぶん小柄な女性だが、黒檀のような肌に浮かぶ二つの栗色の瞳は、威圧に溢れて輝いていた。
「わたくしの……この、腹の子ですのね」
　アンジャハティはトスカルナ家の出――いわゆる直轄領＜サグエ＞の血筋だ。四公たちと常に対立関係にある＜サグエ＞の貴族たちは、＜サグエ＞出身者であるアンジャハティの懐妊を、心から歓んでいる。この期につけこむには、恰好の時機。テナン公子の名を次期皇帝の座から降ろし、＜サグエ＞の元に権力を集める――それも出来得ることなら、“狂った”と噂されるディアスを呼び戻すことなく――ためには、アンジャハティはまたとない時間稼ぎになる。……全員一致で反対されているディアスの解放を、拒む理由がまた一つ増えた。

「……わたくしたちは、あくまで＜サグエ＞派。こちらの血筋を守ると言われて、言い返す権利は無いのじゃ。おまえの腹の子が女児（おなご）であったなら、少しは希望もあろうが…、子の性別を黙って待っておるほど、四公たちも人が善いわけではない。そうなれば、果たして無事に産めるか否か」
「そんな、」
　希望にしてきた我が子が、その希望を奪うかも知れぬ存在になるなどと。
　アンジャハティはしっかりと膨らんだ腹部に手を当てて、目を閉じた。憎しみでしか——嫌悪でしかなかったはずなのに、こうして胎動を感じているうち、どんどん強くなるのは愛しさばかりだ。はっきりと示された暗殺の可能性に、ひやひやと肝を縮めているしかないのか。
「アンジャハティ、おまえには二つの選択肢がある」
　腹に手を当てたまま、黙り込んだアンジャハティを覗き込むように、ファラマファタは身を傾げた。
「ここに居て“皇帝の子”を失うか、逃げて“我が子”を無事産むか——」
　静かな口調には、まるで子供を諭すような柔らかさがあった。
「ファラマさま……」
「暗殺はよもや逃れられん。ここで子を失う時は、おまえの命も無いことじゃろう。考えるのだ。死んでまで、ジャーリヤとして歴史に名を連ねることはないぞ」
　ディアスを助け出す——そのことばかりを考えて、あの日から生きてきた。けれど、ここで自分が選択せねばならぬは、彼の命などではなかった。
　半年以上もともに、彼の無事を祈ってきた半身……。
「逃げます、ギョズデジャーリヤ・ファラマファタ」

　よく考えたわけではなかった。弾けるように口を出た言葉が本心だったのかも、未だによくわからない。
　けれど決して後悔はしない——それだけを我が身に誓って、アンジャハティは深々と頭を下げた。

　陽の光も射すことはなく、ささやかな風すら吹き抜けることがない。
　ただひたすらに続く闇と、嘔吐をさそう腐敗臭……

　血のようにも、肉が腐ったようにも感じられるその只中、そしてひとりの男は変わっていった。

　逃げます――いざ口に出して言うと、一気に体から力が抜けていった。
　“後悔はしない。”
　けれどそれは、あまりに重い言葉だった。
「用意はさせてある。リマに住んでおるわたくしの遠縁の者じゃ。放浪癖のあるやつだが、医師としては立派な女でな」
　アンジャハティはファラマの言葉を、一度頭の中で反芻させて、首を傾げた。
「医師？」
　“逃げる”のだから、てっきり預けられるのは屈強な兵士が何かだと思っていたのだ。権力、武力、血脈――それらすべてを腹に宿す自分を殺そうと追うのは、やはり武人であるはずと。それをかいくぐって逃げるのに、女性と二人で旅と
は、いささか危険にも思える。
「安心せよ、身重の体で旅など無理であろう？　じゃがあの女なら可能。ちょうど今イクパルに渡っていると聞いたからな。男よりも男らしい奴じゃ。多少の手の者からは防げる腕も持っておるし。あとはページスフに身の回りの物を整理す
るよう言いつけたからな。連れて行くといい」
　ファラマの言葉を待つように、背後から肌色の薄い女が現れる。何度か見たことのある、ファラマに従う侍女だった。
「ページスフはリマ人の父とメルトロー人の母を持つ。どの国でも通じる容姿というのは、旅において貴重ぞ」
「ありがとうございます……」
　言い切ってから、くっと喉奥が引きつった。焼けるように、じわじわと胸が熱くなる。……泣いてはいけないのに。
　涙を堪えてじっと俯いていると、ファラマの小さな手が背中に置かれた。
「悲しみは流してしまえ。これからは、泣く暇も無いほどに過酷じゃろうからな」
　ふっと顔を上げると、冗談を言いながらも優しさを崩さぬ、彼女の顔があった。アンジャハティは思わず笑ってしまう。けれど、笑顔で細めた瞳の端から涙がこぼれ落ち……、そうなればあとは堪えなどきかなくなった。
　ファラマの腕に縋り声を嗄らすまで泣いて、もう本当に泣くのはこれが最後だと、何度も自分に言い聞かせる。

　さようなら、ディアス。裏切ってしまって、ごめんなさい。

「アンジャハティさま、お疲れではありませんか。そろそろお休みくださいまし」
　どれくらいの時間が経っただろう。すっかり辺りは暗くなり、気づけば回廊に橙色に揺らめく

蝋燭が灯されていた。
「ではわたくしも戻ろうぞ。気分は落ち着いたようじゃからな、休むとよい」
　垂れ幕をめくって、しずしずと入りきた侍女に微笑んでから、アンジャハティはファラマに向かい、「そういたします」と答えた。栗色の薄い瞳を柔らかく細めて頷き、ファラマは長椅子から立ち上がる。
「……ああ、そなたには礼も言わんとな」
「お礼……ですか？　感謝しきれぬのは、私のほうですのに、」
　ファラマは行きかけた背中を小さく竦めてから、ゆっくりと振り返る。
「そなたの世話をやくのは存外楽しいものであった。おかげで最近は、自分の寝台でぐっすり眠れる」
「あ、」
　アンジャハティは目を開いて、静かに頷いた。
　ファラマファタと出会ったのはハレムにあつらわれた、皇帝の私室に向かう庭でのこと。毎夜、別の女の人生を壊してゆく“夫となるはずだった男”を……彼女は日夜じっと見据えていた。冷え込む夜をたった独りで、静かに過ごす辛さは
どれほどのものか。けれど彼女の口から皇帝に対する憎しみが漏れ出ることは一度もなかった。ぼんやりと灯りの見える室を見つめていたのは、湖面のように静かな瞳だった。
「そなたを世話するのがこれほど楽しいなら、そなたの子を抱くのはもっと楽しく、喜ばしいことであったろうな。わたくしはこのハレムからは、死ぬまで出ぬ。じゃがそなた等のことは、遠く離れても案じておるぞ」
　アンジャハティは微笑んで、深々と頭を下げる。
「最後まで、子供のように甘えてしまい、申し訳ございませんでした」
　ファラマが室を出て行くと、奥から先ほどの侍女ページスフが現れる。リマ王国の血を持っているだけあり、肌の色は薄く髪色も艶やかな黒だ。生粋のメルトロー人とはまた違い、雪のような白さと麦穂に似た濃金ではないが、鼻筋に浮か
ぶわずかなそばかすが、彼女の色の白さを際立たせている。
「葡萄の果実酒でございますわ。明日を出発に控えては、なかなかお眠りになれないでしょうから」
　目の前で礼をとると、赤っぽい、甘い匂いのする液の入った杯を差し出して、彼女はにっこりと笑んだ。
　ありがとうと頷いて、アンジャハティは杯を一気に飲み干した。甘い味と酸味の向こうに、ほろ苦いような独特の味を感じる。葡萄の果実酒を飲むのは初めてだった。酒独特の味よりも、苦味と舌の痺れが気になる。
「ふひぎがあじ……」
　とっさに口を抑えて、アンジャハティは表情を固める。
　舌が回らない。酔った云々ではなく、嫌な痺れがびりびりときているのだ。
　しまった――……、

「ジャーリヤ・アンジャハティ？！」
「うぐ……っ」
　襲い来る激痛は、まるで鈍器で乱れ打つように、下腹に狙いを定めている。飲み込んだ液体が、ごうごうと煮えたぎるように感じる。
「お腹……が、」
　腹を抱えてしゃがみ込み、つっと足を伝う一線の赤い雫を見たとき、アンジャハティは叫んでいた。
「いやあああああぁぁ！！」
「ジャーリヤ・アンジャハティ！！　誰か……誰……きゃああ！」
　ページスフの悲鳴が聞こえて、どさり、目の前に何かが転がる。それが先ほどまで、笑顔で自分に給仕してくれていた少女だと気づいて、アンジャハティは慌てて目線を上に上げた。
「誰ぞの仕業か、腹の子は降りたようだな。だが念には念を入れねばならない。姫よ、許せ」
　簡易の鎧を着て体型と顔を隠した男たちが数人、アンジャハティを取り囲んでいた。
「い……いや…」
　ずるずると立ち上がり、男たちの隙間から逃げようと駆け出す。――が、焼けるような痛みがざっくりと背中に走り、アンジャハティは前へとつんのめって倒れた。
　背中を斬られたのだと悟るまで、しばらく時間を要した。恐る恐る振り返った視線の先に、血のしたたる湾刀を構える男の姿が目に入る。
「ひっ」
「悪く思うな、ジャーリヤ・アンジャハティ。我々はなんとしても、」
　悲鳴を上げる隙もなく、刃が腹へと下りてくる。
　もうだめだ――死を覚悟して、アンジャハティは両目を固く結んだ。

「なんとしても、我が公子を玉座に――」

　忘れようと思ったはずなのに、真っ暗な瞼のうらには、最後にみたディアスの真剣な顔が、焼きついて離れなかった。

　眩しさにまぶたを突かれて、アンジャハティは目を覚ました。
　重しを乗せたような体のだるさと、腹に感じる鈍い痛み。
　顔をゆがめてそろそろと開けた細い視界から、一気に光が入り込む。
「うぅ……う」
　死んでいなかった。……覚悟したはずなのに。思い出した途端にからだが激しく震えだす。ゆっくりと目をつむって息を吐きながら、考えたくないと思った。腹に走る鈍い痛みが、得も言えぬ喪失感をあたえている。けれどそのぼんやりと
した理由すら、考えたくはない。
「ディアス……」
　愛しかった名前。裏切った人。彼は今ごろ、どうしているのだろうか。
　――会いたい。イクパルから逃げようとした自分には……彼を待つことができなかった自分には、もう愛を告げる資格はないのに。それでも会いたいなんて、都合のいい話だ。あの優しいままの彼ならば、きっと許して笑ってくれる。そう思えてしまう自分に嫌気を感じて、アンジャハティは目を閉じた。眠って気持ちを落ち着かせよう、そう思った矢先。
　ふわり、黒い影が瞼に落ちた。その暗さに覗き込まれたのだと察して、ふたたび目を開けると、思いも寄らぬ顔が視界に映る。
　濃い茶の髪、きりと伸びた眉と、その下にならぶ切れ長の瞳を持つ少年。まだ声変わりも終えぬような、あどけなさが残っている。
「だっ大丈夫ですか？」
　まさか目を開けるとは思わなかったのだろう。驚いた表情を浮かべて、少年は飛び退く。
　恐怖を与えぬようにだろうか。とっさにとられた控えめな距離。それが、思えばこの少年の性格をすべて映していたのだ。
　――ああ、この子は。
　直感のようなものが、こめかみの辺りを貫いた。心配げに返事を待つ彼の顔立ちに、かすかながらも“面影”を見てしまう。
「ええ……」
　大丈夫だと、いったい何に対してなのか力なく頷いたアンジャハティを見つめて、少年はにっこりと笑った。きつめの顔立ちをしているのに、なんて柔らかく笑う子だろう。
「不躾なことをしてしまってごめんなさい。でもよかった、僕の母はあなたのようになって、そのまま目覚めなかったものですから」
　心配で。そう呟く少年には、微塵の穢れも感じられない。自分をとり巻く陰謀、そしてその陰謀の刃が、アンジャハティやディアス……はたまた三人もの皇子に向けられたことを、露とも知らぬ顔。
「コンツ……エトワルト公子」
　“エトワルト”。テナンの名はみな、メルトローじみたものばかり。似ているのは、イクパルへの反骨からか、それとも単に、とおい昔タントルアス王の支配を受けたという、隔絶された島国だ

からこその名残だろうか。
　アンジャハティは掠れた声で、少年の名を口に乗せた。罪深い……けれど罪などまったく無い、その名を。
「はい。お初にお目にかかります、アンジャハティ・トスカルナ姫」
「あの、ここは」
　見覚えのない部屋だが、てっきりハレムの一室なのだと思いこんでいた。男子禁制のハレムに、この少年が現れるはずがない。となると、ここがどこなのか、途端にわからなくなる。
「ここはワルダヤ・ハサリ・サプリズ中佐の宮です。中佐が姫をハレムからお救いし、こちらに」
「ワルダヤ…」
　見覚えのない室に納得するものの、今度はワルダヤとは誰だったか思い出せずに首をひねる。曇った顔のままのアンジャハティを見て、少年は微笑んだ。
「お忘れになりましたか？　一度だけ、お会いしたことがあると伺ってます。ハレムの裏庭で」
「……もしや、ギョズデジャーリヤ・ファラマファタの」
　――ワルダヤ・ハサリ。そうだ、以前ファラマに連れゆかれた裏庭で、軍人じみた男性と会ったのだった。お見知りおきをと言われたものの、それがすっかり記憶の外だったとは。
「ごめんなさい、話すことを禁じられていたので直接ご挨拶していないのです。お会いできますか、お礼を申し上げなくては」
「お伝えしようと思っていたところです。走って呼んでまいりますね」
「ありがとうございます、エトワルト公子」
「いいえ。……あ、それと」
「はい？」
「僕はもう、テナンには住んでいないので、よろしければ字のほうでお呼びくださいませんか」
　コンツェと。笑ってそう言い残し、少年は室を抜けて走っていく。
「ワルターさんっ！　姫が！」
「……コンツェ」
　回廊から聞こえてくる声にわずかに笑みながら、アンジャハティはよほどイクパルらしい名を口にした。
　憎むべき対象を見つけたら、もっと激しい感情が噴き出すと思っていたのに。いざ目の前にすると、怒りどころか悲しみさえも、すとんと落ちていってしまった。
　ディアスが投獄された、すべての元凶である少年。――いや、元凶をいうならばもっと別のことか。テナン公が正妃を差し出したという夜、アンジャハティが第一王子を拒んだ夜会。皆が皆、この自分でさえ原因の一端を担っている。
「泣いているかと思えば、存外静かですね」
　ひとり感傷に浸っていると、室の入り口に美しい白銀の髪が立っていた。それを見つけてアンジャハティは顔を背けたが、そんなあからさまな態度にもかかわらず、現れた人物はつかつかと歩いてくるのだった。

「お元気そうで安心しましたよ。かれこれ……四年ぶりでしたか」
「兄上、こんなところへお出でになってよろしかったのですか？　ここはサプリズ宮なのでしょう」
　皇帝宮のハレムではなく、一貴族の宮なのに。
　兄とは、もう久しく会っていなかった。ともに学び育ったはずの彼は、いつのまにかその心を野心に浸けてしまったのだ。愛人の子というだけでトスカルナを継がせなかった父に抗するように、彼は家を出て行った。ハレムに、一番権力に近いその場所に。性別を捨ててまで。
「心配することはありません。これでも宦官長にまで上り詰め、多少の自由は利くのです。これを飲みなさい。あの薬は、身体に負担が大きい」
「……薬？」
　理解者だと思っていた。突然できた兄ではあったが、優しくしてもらった記憶もたしかにある。肉親というつながりに抱いた、ずっと守ってもらえるという甘え。けれど彼は、アンジャハティとトスカルナ家、そして母を、彼と関わる者すべてを捨て去り、権力の世界へと行ってしまった。ただ父に、認められたいがためだけに。
「兄上……まさか、あなたなのですか」
　アンジャハティの頬を伝い始めた涙を黙って見つめながら、兄――ウズルダンは静かに言った。
「半分は」
「どうして……！」
「アンジャハティ。お前は皇帝の子を産んで、それでどうするつもりだったのです」
「そんなこと、」
「傷が癒えたらここを去りなさい。お前は死なずに、真実を見すぎている」
「わかっていますわ、テナン公国ですのね？　黒幕は、すべてあの公王がおこなったと言うのでしょう。さっきの公子が、皇帝の嫡子だから！！」
　振り上げた手を掴まれて、見上げると兄の悲痛な顔が目に入った。冷たい仮面のような顔立ちなのに、こんな表情ができるのかと思えるぐらい。
「……黙りなさい」
　掴まれた手が、きりきりと痛い。
「第四皇子を解放するために、お前の子は邪魔になる。私にはそれだけです」
「どういうことなのですか？　兄上はわたくしに薬を盛っただけなのでは？　あの鎧の者たちも、あなたの差し金なのですか！」
「そう思いたければ、思えばいい」
　白い頬が皮肉げにゆがむのを見て、アンジャハティは激昂した。
「けっきょく、あなたは権力だけなのですわね！」
　そのためには、妹を殺しても構わないとさえ思えるのか。怒りに震えだしたアンジャハティを見下ろして、ウズルダンは息を吐いた。
「私を憎めばいい。四公などへ憎しみをぶつけるのはやめなさい。そうしていれば、お前は今後も死なずに済む」

「――いい加減にしないかウズルダン。妹君を落ち着かせてやれ」
　仕切り幕を潜り出て、大柄な男が顔を出した。ワルダヤ・サプリズ――暗がりで見えなかったその姿をようやく確認して、アンジャハティは納得する。面立ちに、ファラマファタの名残があったのだ。
　強く鋭利な骨格と、意志の固そうな栗色の瞳、ファラマほどではなくも色の濃い肌。あきらかに、彼女と血縁を持つことをただよわせている。名前こそイクパル本土のものだが、その血筋にテナンが混じることには間違いなかった。
「緊急ですので、ご挨拶はのちほど。――アンジャハティ姫、実質、貴女はまだ暗殺されたことになっております。ここへお運びしたのも、生存の事実を隠すため。いつ事が公になるか分かりませんが、そうなるとまたお命が危ない」
「ならばもう、危ないのではなくて？　わたくしの兄が首謀者のようですから」
　その首謀者は、今ここにいてアンジャハティの生存を確認しているのだから。
　皮肉を交えて吐き出したアンジャハティを困ったように見つめて、ワルダヤは肩をすくめた。
「まったく、そんなことを申し上げたのですか、こいつは。……失礼、姫。こいつは口が足りない奴ですが、今回のは貴女を守ろうとしてのこともあったのです。無論、首謀者もこいつではない。腹の子が降りさえすれば、貴女は暗殺されずに済んだのですから。けれど一足遅かったようだ。まさか奴らとはち合わせるこ
とになるとは」
「……どういう、」
「首謀者を言うことはできません。いや、……もうお察しでしたか。けれど口には出せない。その位、大きいということですよ姫。そのために貴女は“死んだまま”、この国から逃げて頂く必要がある」
「もとから……逃げる予定でしたのに」
「――そう、御子を身ごもったまま逃げるご予定だった。ですがそれこそ、人知れず殺される危険を増す結果になった」
　ワルダヤはゆっくりと深い息をして、アンジャハティと目線を合わせるために跪く。横に伸びた形のいい眉をひそめて、彼は続けた。
「もう遺言になってしまいましたが。ファラマファタ様の手配で、貴女を逃がす手順は未だ残っております。それを使い、今日中に」
「遺言……？」
「はい。乗り込んだ奴らから貴女を助けるため、知らせに走ったようです。血だらけのままウズルダンの元に。けれどもう、その時には助けられる域を越えていました。……これを貴女にと」
　手渡されたのはいつか、ファラマが見せてくれた銀色の鍵だった。檻のようなハレムから“逃げる”日のために覚えておけと。
「そんな、」
　自分のせいで、またも大切な命を無くしてしまった。あんなにも親身に、痛みをわかってくれた女性なのに。恩返しもできぬまま、死んでしまうなんて……。
「姫、手筈の者が貴女を逃がすため帝都に参っております」

ワルダヤはアンジャハティの肩に手を置いて、言った。
「どうか何も知らぬまま、お逃げください」

　あの日失った物は、決して一つだけではなかった。
　友を失い、臨月の子を失い、その後遺症で二度と子をもうけることのできぬ体になり……ディアスとの未来は当然のことながら無くなった。
　亡きファラマファタの意向通り、放浪癖のひどかったグラフィアネ・テリゼアシダ・シマニの下で五年の歳月を逃亡し——彼女の下で暮らすうち、自然と医者を目指していた。
　暗殺が未遂に終わったことは時を置かずして広まり、事実上「失踪」になった娘を父宰相は勘当。さらに皇家トスカルナ籍からの除名を受けて、結果的には皇籍の剥奪とまでになった。
　五年後に戻ってきたのも本来はグラフィアネの放浪の一つ。だが突然「自分は歳だからもう放浪はやめることにした」と言い出すと、当のグラフィアネは帝都にどんと腰を落ち着けてしまったのだ。
　しかし、まるで図ったようにアエドゲヌ帝は死んでおり、ようやく折れた元老たちの手でディアスは解放された。地位を取り戻し玉座に身を置いた彼は、驚くほどの変貌を見せる。
　鋭い顔は崩されることが決してなくなり、どこか猛獣じみた印象に変わって。優しげな顔を、一切見せることがなくなった。長い投獄のせいで痩せているかと思えば、以前より体格が筋肉質になった気さえする。まるで「闇」そのものを体現してしまったかのような新皇帝は、しかし噂とは違えて狂ってはおらず、周囲も驚くほど着実に政務を取り仕切っていた——最初の半年は。
　グラフィアネは名前からも知れる通り、テナン公国の王族。もはや帝都で何もすることがなかったアンジャハティは、彼女の後見を受けて軍に上がり、軍医となる。
　時を同じくして父である宰相が亡くなり、どこをどう画策したのやら、その後釜にはちゃっかりと兄ウズルダンの姿があった。その頃からだろうか——ディアスが政務を執らなくなり、ハレムに通いつめるようになったのは———……、

*　*　*　*　*

　「アンジャハティ」
　呼ばれて、顔を上げる。
　長い回想から目覚めて、アンは小さく笑った。“アンジャハティ”などとは、なんて懐かしい響きだろうか。
　昔日のディルージャ皇子は、見る影もなく消え去った。ただ、その身に深い闇を宿し、何を考えているのかわからぬ冷たい笑みだけが、今の彼の笑顔になった。あんなに豊かだった表情は、ちらとも顔を見せない。
「……わかりました。継ぎましょう、トスカルナを」
　色褪せ始めた過去の記憶に一度ふたを閉めて、アンは答えた。
「私は子孫を残すことはできませんので、トスカルナの血は名ばかりになりましょうが」
　薔薇を眺めていたディアスはその言葉で振り返り、頷く。

　思えば、変わった彼を見て、自分も女であることを捨てたのかもしれない。軍に入り髪を切りつめ、男のような口調になって。獄中の彼に何が起こったのかはわからない。けれど互いに変わった様を見合ったとき、自然と親しげな笑いがこみ上げたのは覚えている。「久しぶり」と、苦もなく口を出た言葉。皮肉や冗談さえも。
　様々な噂は飛び交うけれど、彼の空白の歳月をアンは知らない。ディアス自身、誰にも語ろうとしなかったせいもある。ワルターに聞いたこともあったが、「三日は気分が悪くなるぞ」と言われてしまい、詮索もやめた。
「養子をとることを認めよう。本来ならばジャーリヤに産ませた私の子を下賜すべきなんだが」
　苦い表情を顔にのぼらせ、ディアスは言う。
「いいえ。養子にはバッソスあたりからと考えてますので。陛下の血筋がなくとも結構ですよ」
　彼は即位以来、子ができていない。不能なのだと囁く者もいたが、アンはそうは思わなかった。彼自身わざと作らぬのか、別の手によりわざと出来ぬよう細工されているのか……そのどちらか。いや、両方なのかもしれない。少なくとも前者にはアン自身、覚えがある。後者は言わずもがな、だ。あんなに色に富む生活を送っていて、子が出来ないその裏には、少なからず「兄」が関わっていることに疑いはない。
　人生は五十年。折り返しにも差し掛かるような年齢で、しかも皇帝という立場に就きながら、彼らはいったい何を恐れているのだろうか。
　もうじき二十四にもなる、回想の中からは十ほども歳をとった彼を、アンはじっと見つめた。
「何だ。……ああ、これか」
　視線を受けて目を細めたディアスは、得心がいったように首筋を覆う外套の襟を立てる。そんなところはまったく見ていなかったのだが、彼の手から隠される前に、くっきりと歯形が残るのをアンは見つけてしまっていた。
「歯形ですか？」
　噛みつかれるほどのことを、したのだという証拠。一瞬しか見えなかったが、傷はすでに薄く、治りかけている。なのにまだ痛むのか、ディアスは首元を抑えた手でさすっていた。
「また随分と手荒なことを、」
「手荒だったかもしれんな。噛まれた上にしっかり血まで吸われては」
　冗談なのか皮肉なのか。けれどそれを語る横顔に、かつての彼の面影を見て――アンは驚く。どこか面白がるような、柔らかな顔。

　――消え去ったのでは、なかったのか。

「陛下、お相手は――」
　震えた声で問うたアンを、わずかな時間じっと見据え、彼は声を立てて笑い始めた。
「虎か豹か。さあ何だと思う」
　さきほどの柔らかい顔はどこへやら、皮肉げな表情しか見受けられない。
「はぁ、タァインですか？」

虎(タァイン)……この人はとうとう別の世界へいってしまったのだろうか。アンは一抹の不安を覚えながら、首を横に振る。
「ご冗談を。またバッソスでもジャーリヤを連れてきたと聞きましたよ。ヒーハヴァティ・ウィエンラ公女でしたか」
　どちらにせよ、彼の冷たく固まってしまった心を溶かす者が現れたのだとしたら――、それは嬉しいことだった。
　悔しいけれど、あまりに時が経ちすぎた自分たちでは、もうやり直しはきかないから。
「そうだ、フェイリットをご存じありませんか。兄の所で侍女をしているはずなんですが、一向に姿が。トスカルナ籍に戻ることをお許し頂けるなら、あの子は私が引き取りますので」
　年端もいかぬ女の子をひとり、いつまでもあの氷山男の下に置くわけにもいくまい。
　しかし言ってしまってから、アンは気づく。そもそも彼はフェイリットを知らなかったのだ。あの竜狩りの夜に一度は会っているが、それは名前すら名乗らぬささいな時間だった。
「あ、フェイリットというのは、」
「……今夜あたり行くだろう。お前のところに一番に行くと意気込んでいたからな」
　去り際にそう残して、ディアスの背中が遠くなる。
「……って、陛下！？　なんで知って……」
「だが、引き取るというのは考え直せ」
　アンはきょとんと肩を落として、眉を寄せる。
　まさか。
　彼の右手に無造作に握られる蕾の薔薇を見つめて、アンは額に手を当てた。――蕾か、耳が痛いな。そう彼は、言わなかっただろうか。
「嘘でしょう、」
　……本当なら、これはあの子を問いつめる必要があるかもしれない。
　最後に怪我の傷を診てから、もうふた月にもなっていた。ぱったりと見えなくなって、随分と久しい。

「来るといっても診療所と宮、どっちなんだ？　いや、もうこんな時間だからトスカルナ宮か。母上に知らせないと……」
　料理をたくさん作ってやろう。砂漠を長く旅してきたなら、帝都の料理は恋しいはずだから。
　――しかし、脳みそが股の間にぶら下がってるような奴だぞ……あのエロ皇帝は。いいのか、フェイリット？
　アンは困惑に眉をひそめつつ、母に知らせるために庭園から回廊へと上がる。
「そういえば、コンツェも来ると言っていたな……ちょうどいい、皆で再会を祝おう――」

　アンジャハティであった頃より、自分(アン)には大切な人たちがいる。慕ってくれる部下たち、治療に訪れる兵たち、そして家族と友人たち……彼らと共に過ごす今。それはなんと満たされた時間だろう。
「――アン！　ただいま！」

名を呼ぶ軽やかな声を遠くに聴いて、アンは足を止める。
まだ少女だったあのころ、強くなりたいと願った。その願いは、果たして叶ったかどうか。
――いや、弱くてもいい。自分を見失わなければ、大切な人を守れるはず。それが強さに変わるなら、弱いままで。
夜会に震え、憂鬱になっていた紅い鳥。イクパルを越えて羽ばたいて、また戻ってこれたのだから。
アンは笑みを浮かべて、現在の自分を想った。

「――おかえり」

【夜会に鳴く深紅の鳥・完】

それから三日後、かの公国は独立を唱い――宣戦を布告する。
新王が即位したのは、さらにひと月の時を経てのことだった。